

渡来民と「弥生人」の関係についての一考察

秋月 耀

はじめに

従来、日本列島の社会は、水田耕作の開始を画期に、質的变化を遂げたとされている。この水田稲作は、渡来民により、先進的文化とともに、もたらされた。

日本古代史における渡来民については、概ね、次のように説明されている。

半島方面から、新たな渡来民集団が大挙渡来した。「弥生人」である。「弥生人」は、先進的な「弥生文化」をもたらした。その象徴が水田稲作である。水田耕作の拡大により、「弥生人」の人口は急激に増加し、短期間に、先住民・「縄文人」を制圧・駆逐した。水田稲作は、彼らにより、短期間に北海道を除く日本列島全土に広まった。日本社会は、水田稲作の開始を契機に、統合に向け質的变化を遂げた。集落が成立・拡大し、九州・西日本を中心に、地域的統合が始まった。

この渡来民たる「弥生人」が、何時、何処から、如何に、渡来したのかについては、今も、定かではない。これらを解明するためには、次の二つの論点を明確にすることが必要となる。

第一点は、渡来の実行可能性との関係である。大勢の渡来民が列島にやってくるためには、それだけの海洋輸送力を確保しなければならない。あの時代に、それが可能であったのかということである。大陸方面から難民が大挙渡来するなどは、言うは易いが、実際は至難である。

第二の論点は、水田稲作拡大の実態との関係である。大勢の渡来民が列島にやって来たのであれば、水田稲作は急速に拡大したのではないかということである。多数の渡来民が大量のイネを持ち込んだという事実は覚束ない。水田耕作が大規模に開始され、急速に拡大したという事態も明確とはいえない。武力による征服を裏付ける証拠も見当たらない。

本稿では、日本列島で水田稲作が伝播し拡大した状況を中心に、渡来民と「弥生人」の関係について考察する。

1. 水田稲作の伝来と渡来民

イネ・稲作の伝播は、人間の移動と一体である。日本列島で水田稲作が開始された時期、即ち、「弥生人」渡来の時期とされる。

第一の論点として、大勢の渡来民が列島にやってくるためには、それだけの船と航海術を動員しなければならないが、あの時代にそれが可能だったのかについて考察する。

大陸方面から難民が渡来することは容易ではない。日本列島に渡来し、水田稲作を持ち込む

には、外洋航海能力が絶対的条件である。水田稲作が列島に伝播した状況を、外洋航海の実行可能性の観点から、考察する。

(1)イネ・稲作の起源と拡散

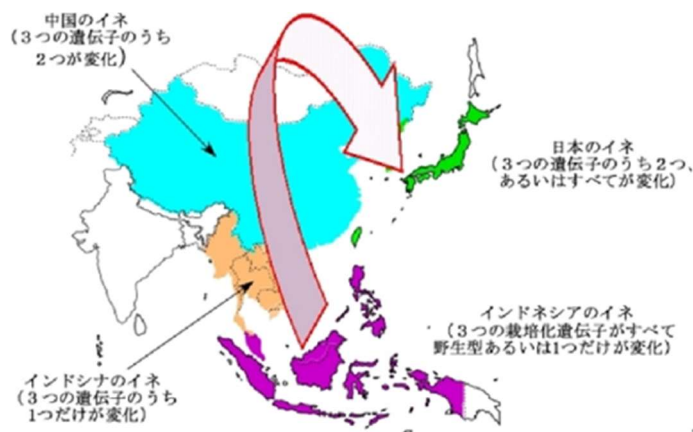
はじめに、イネと稲作の起源と伝播等について概観する。イネの種類と稲作の方法は多岐にわたる。巷間、イネの栽培と水田稲作とを混同した立論も多い。

イネの栽培種は、アフリカイネとアジアイネがあり、アジアイネはインディカとジャポニカに分かれる。ジャポニカとインディカは、栽培化以前に分かれた。

東アジアでは、主にジャポニカが栽培される。ジャポニカは、熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカに分かれる。熱帯ジャポニカは、現在も、専ら陸稲として、東南アジア方面等の焼畑等で栽培される。温帯ジャポニカは、専ら水稲として栽培される。低湿地に籾を直播きする湿田と、苗を育て灌漑により水をひき乾燥地に田植えをする乾田で栽培される。

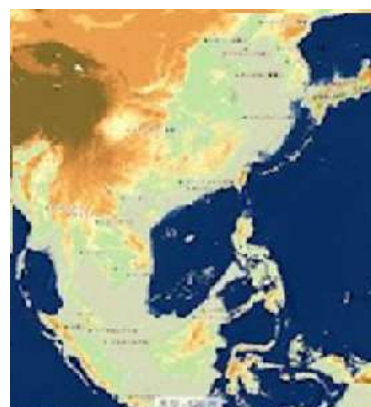
イネ・稲作の起源と拡散経路について、以前は雲南省・インドアッサム州周辺地域、次に長江流域とされていた。近年、考古資料とプラント・オパール(DNA分析等)により、明確になりつつある。最近の研究(『農業生物資源研究所』2008.7)によれば

- ①現在東南アジアで陸稲として栽培されている熱帯ジャポニカイネがジャポニカイネの起源に近い
- ②熱帯ジャポニカイネが中国に伝わって長江流域で水田化され、温帯ジャポニカイネが生まれた
- ③温帯ジャポニカイネが更に日本に伝わった。



氷河期、東南アジア地域には、広大な陸地が存在した。スンダランドと呼ばれる。アジアイネと稲作の起源は、このスンダランド周辺であると考えられる。

長江流域では、多くの稲作に関連する考古資料が発見されている。陸稲(熱帯ジャポニカ)は、最古の稲作遺跡(紀元前14000~12000年頃)が発見されている。温帯ジャポニカの水田稲作は、最古の水田遺構(紀元前7000~6500年前頃)が発見されている。



イネ・稲作の伝播には、基本的には人の移動を伴う。熱帯ジャポニカがスンダランド方面から長江流域に伝播したとすれば、この地域の人々が、イネを携えて、移動・移住したことは十分考えられる。全面的に否定すること自体が、不自然・不合理である。

氷河期終末期(紀元前1万年以前頃)、既に稲作が始まり、土器が使用された。長江流域では、長江文明の存在が確認されている。長江文明を築いた人々の出自については、未だ明確になっていない。

(2)イネ・稲作の日本列島への伝播

初期のイネ・稲作は、3ルート→朝鮮半島を経由して北九州、長江流域から海をわたって九州西部、南方から琉球列島伝いで、日本列島に持ち込まれたとされる。

これらの地と日本列島の間では、氷河期前後から、人の往来が行われていた。イネ・稲作も、伝播した。日本列島では、約30の「縄文時代」の遺跡から、熱帯ジャポニカのプラント・オパールが検出されている。土器に付いた粃の跡も、数例みられる。この時代に、稲作が始められていたと想定される。水田を伴わない、ただ地面にモミを播くだけという雑駁農耕であった。焼畑の稲作あるいは他の雑穀との混作であった可能性も高い。

列島で水田稲作が開始された時期は、新旧の通説によれば、紀元前1000年、あるいは、5乃至3世紀とされる。いずれの説でも、水田稲作が伝播したとされるまでに、温帯ジャポニカの栽培が江南で開始されてから、実に、数千年を要したことになる。後述するように、この沿岸地域の住民は、周辺地域を往来していた。温帯ジャポニカは、水田を使用しない方法(陸稲、湿田)による栽培も可能である。この数千年の長期間、日本列島の住民が、温帯ジャポニカの栽培種と水田稲作とは全く無縁であったと見做すこと自体が、不自然・不合理である。説得力ある論拠が必要とされる。

温帯ジャポニカと水田稲作も、長江流域から各地に拡散した。半島と列島で確認された、初期の水田遺構は、ほぼ同時期のものとされている。従来、日本列島には、半島経由で、伝えられたとされていた。近年、新たな研究成果に基づき、列島への伝播ルートについて、新たな見解が提示されている。

佐藤洋一郎氏によれば、

DNA解析により、列島と大陸・半島のイネの種類の違いが確認された。

列島には、大陸のイネの種類の一部しか伝わっていない。大陸には多くの種類が栽培されていた。日本に持ち込まれた量は、

稲作は、朝鮮半島を経由せずに日本に伝来した



- 日本の稲の遺伝子は3種類
 - ・RM1-a, RM1-b, RM1-c
- 中国の稲の遺伝子は6割がRM1-b
- 朝鮮半島の稲の遺伝子はRM1-bがゼロ
- 松芳里遺跡 (韓国中西部)
 - ・炭素14年代測定法
 - ・水稲開始は朝鮮東南部や北部九州の方が朝鮮中西部より早い
- 朝鮮半島の水稲栽培は1500年前までしか遡れない

『稲作の伝播』佐藤洋一郎著作から引用
(水田稲作の起源 | 日本の歴史アップデート)

水田稲作の起源 | 日本の歴史アップデート より

わずかであったと想定される。他方、列島に伝播したイネの多数を占める種類は、半島では、殆ど確認されない。この種類が、半島を経由せず、大陸から直接伝播したことも想定される。

(3)基本的な問題

どのような集団が水田稲作を持ち込んだかについては、いくつかの可能性が指摘されている。

- ・政治的支援の下渡来した、組織的集団(春秋戦国時代の呉越、秦末の伝説上の徐福)。
- ・難民(呉越)
- ・北九州の先住民 等

いずれの集団も、水田稲作が列島に伝播し、拡大するには、多くの条件を克服しなければならない。何よりも、水田稲作を四面環海の日本列島に持ち込むには、外洋を無事に航海しなければならない。

水田稲作が列島に伝播した状況を、外洋航海の実行可能性の観点から検討する。以下のケースに大別される。

【ケース1】列島沿岸部に拠点を置く住民(航海民)が持ち込んだ

【ケース2】大陸沿岸部に拠点を置く住民(航海民)が持ち込んだが、移住はせず

【ケース3】大陸沿岸部に拠点を置く住民(航海民)が持ち込み、移住した

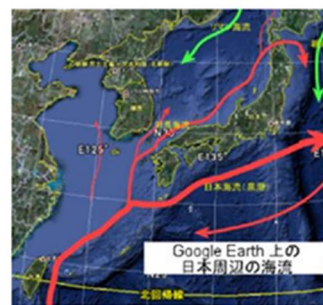
【ケース4】大陸内陸部の住民(水田稲作民)が持ち込み、移住した

【ケース1】列島沿岸部に拠点を置く住民(航海民)が持ち込んだ

氷河期終末期(1万年前)、急激な温暖化に伴い、前述のスンダランドの他、日本列島周辺の大陸棚(東シナ海・黄海)等広大な地域も水没した。この地域の住民が、江南から列島に至る沿岸地域に移住し、さらに、日本列島にも渡来したことが確認されている。

彼らの内で、列島と大陸の沿岸部に移住した住民が、漁労採集に従事したことは当然である。彼等の内には、外洋を航海する技術を習得し、周辺地域を往来した者達・集団(いわゆる航海民)も存在した。彼等は、既に氷河期前後から、周辺海域を往来していた。当時、世界的にも、大洋を航海した民族は極めて少ない。

多くの考古資料が、日本列島と南方・大陸・半島間では、相当長期にわたり、交流・交易が進んでいたことを示す。初期は、貝の装身具、黒曜石等に代表される。日本海側の「縄文」遺跡(京都府・浦入、福井県・鳥浜貝塚等)から、丸木舟、楔状耳飾り、漆が出土した。沖縄では、戦国の七雄・燕国(紀元前11～3世紀)で流通した青銅製貨幣・明刀銭が出土している。



現在の日本列島周辺の海流
風仙洞 | 弥生時代の日本列島 より

これらの大陸と列島との交易には、当然、列島に本拠を置く航海民も従事していたと思われる。彼らが初期の熱帯ジャポニカのイネと焼畑等の陸稲稲作を日本列島に持ち込んだことも、十分想定される。

水田稲作も、彼らにより、能動的に導入されたことも考えられる。彼等が水田稲作を持ち込んだ時期は、一般論としては、大陸の社会情勢を問わず、いかなる時期でも可能といえる。彼らは、基本的には漁労採集・半農半漁—他の雑穀等の栽培と漁撈・採集を並立させていた。後述するような、生活基盤を心配する必要もない。

勿論、彼らは、大陸で、水田稲作に必要な技術等を習得しなければならない。列島では、労働力、組織力等の一定の態勢も欠かせない。彼らが、これらの条件を確保することが前提である。

【ケース2】大陸沿岸部に拠点を置く住民(航海民)が持ち込んだが、移住はせず

大陸南部(江南地方)等の航海民も、交易等で、列島沿岸部と往来していたと思われる。彼等が漁労採集・半農半漁であった場合、水田稲作に通じていたことも十分想定される。彼等が移住することなく、水田稲作を持ち込んだことも同様である。

この場合、列島の住民が生活基盤を侵害されるはことない。両者間の対立・衝突は必然ではない。

【ケース3】大陸沿岸部に拠点を置く住民(航海民)が持ち込み、移住した

大陸南部(江南地方)等の航海民が、列島に移住する—上陸し生活基盤を確保する—ことも想定される。

この場合、移住先の住民との関係が渡来の成否に直結する。大陸から渡来した海洋民は、基本的には侵入者である。両者の対立・衝突は十分想定される。

歴史上、異民族の渡来民は侵入者であり、先住民を襲撃・略奪し、食料と労働力を確保した。

先住民を隷属的支配下に置き、労働力を確保した。日本列島においても、先住民の生活基盤等と衝突する。



鬼界カルデラ 大爆発(7,300年前)の火砕流・火山灰の範囲

鬼界カルデラ - Wikipedia より

大爆発後、大陸の航海民等が移住したことも想定され

る。

極めて稀ながら、両者が同族あるいは極めて親密である場合もありえないわけではない。その場合、水田稲作が、彼らから列島の海洋民その他の住民に対して、平和裏に伝えられたことも想定される。

以上の3ケースは、渡来民が少数の場合である。

【ケース4】大陸内陸部の住民(水田稲作民)が持ち込み、移住した

一般に議論される場合には、大陸の混乱期に多数の難民が渡来するケースである。この場合も、前述のような外洋航海の問題から、極めて困難といえる。長江流域等の稲作耕作民だけでは、独力で、直接渡来することは、ほとんど不可能といえる。航海民の存在が不可欠である。一度の航海あたりの輸送量も限定される。大船団の編成も難しい。彼等が多量の人員と物資を同時に、あるいは、継続的に海上輸送する能力を確保することは、極めて困難であったと考えられる。

以上から、水田稲作が伝播したケースを整理する。

日本列島に渡来し、水田稲作を持ち込むには、実行可能性の観点からは、外洋航海能力が絶対的条件である。多数の難民が、あるいは、大挙して渡来したという状況は想定し難い。

いずれの場合でも、列島あるいは大陸の海洋民の存在なしに渡海することは至難である。彼らが無関係な場合は想定し難い。

水田稲作は、彼らが自ら、あるいは、彼等とともに渡来した稲作民が、持ち込んだ場合とが想定される。

2. 水田稲作の拡大と渡来民

次に、水田耕作伝播後の日本列島の状況について考察する。

第二の論点として、大勢の渡来民が列島にやって来たのであれば、武力による征服を伴ったのではないかと、水田稲作は急速に拡大したのではないかとについて考察する、武力征服、水田稲作の大規模・急速な拡大という事態も明確されていない。

(1) 水田稲作の考古学資料

日本列島の水田稲作は、最初に、北九州地域から開始された。唐津市・菜畑遺跡で発掘された水田遺構の年代は、現時点では、紀元前1420～1100年と測定されている。朝鮮半島(南東部の水田遺構は紀元前11世紀)と同時期か、さらに古いことになる。福岡県・板付遺跡、佐賀県唐津市・菜畑遺跡などから、炭化米や土器に付着したモミの圧痕、水田跡、石包丁、石斧等の農具、用水路、田下駄等が発見されている。

当時、九州では灌漑による水田稲作がおこなわれる一方で、陸稲や雑穀類の栽培がおこなわれていた。水田稲作と陸稲栽培をおこなっていた人々の由来や相互の関係は、未だ、明確ではない。

北九州地方に伝来した水田稲作は、日本列島を東へと伝播した。現在、水田は全国で 20 か所以上発見されている。

水田稲作が開始された時期は、新旧の通説によれば、紀元前1000年、あるいは、5乃至3世紀とされる。

旧説では、この時期は、紀元前5乃至3世紀であった。従来の説明では、渡来人の「弥生人」が伝えた水田稲作を、先住民の「縄文人」が、すぐに受け入れ、農耕社会が瞬く間に成立し、「弥生時代」が到来した。

その後、炭素 14 年代測定の結果、水田稲作は、従来説より500年遡り、紀元前 1000 年とされた。この稲作開始の測定年代は、測定の在り方自体をめぐる異論も多い。この結果、現在の説明では、水田稲作を受け入れたのは九州北部から始まって東海地方までで(それでも500年かかっている。)、そこでストップした。それ以遠の東日本の「縄文人」はなかなか受け入れなかった。

(2)水田稲作の実態

日本列島に持ち込まれた温帯ジャポニカの事態について、概ね、次のとおりとされる(佐藤洋一郎氏『米の日本史』『稲の日本史』)。

日本に伝播した温帯ジャポニカは、DNA解析によれば、大陸で栽培されたものの一部の種類にすぎない。日本には、温帯ジャポニカは、大量には持ち込まれてはいない。

渡来人により、日本列島に運んでこられた水稲の量がわずかだった、という推論が成り立つ。弥生時代に、多量の水稲が水田耕作の技術とともに渡来したという従来の史観には大きな疑問が生じる。

水田稲作の状況についての見解は、概ね、次のとおりである。

水田耕作は、開始から短期間で、急速に、日本全土に広まってはいない。

当時の稲作の全てが、水田耕作ではない。水田耕作の技術や稲作道具は導入されたが、焼き畑耕作も継続された。イネも多くが熱帯ジャポニカのままであった。温帯ジャポニカ種も、全てが、水稲、あるいは、水田耕作ではない。

水田耕作は、同じ温帯ジャポニカ種の陸稲、あるいは、湿田耕作との並立が、中世後半まで続いた。他の種類・栽培法のイネ、他の雑穀等の耕作、さらには、園耕とも並立していた。青々とした水田や黄金色の稲穂の東に象徴される牧歌的光景は、後世のフィクションということになる。

以上の見解に基づくならば、多数の渡来民が水田稲作を持ち込んだという事態は想定し難い。日本列島で、水田耕作が大規模に開始され、急速に拡大したという事態も、確認されていない。渡来民が急激に拡大したという事態も、確認できていない。

(3)支石墓・甕棺との関係

列島における渡来人の状況を検証する上で、有効な考古学資料として、支石墓・甕棺があげられる。北九州地方では、多くの支石墓、甕棺墓がみられる。いずれも大陸・半島を起源とする。これらは、水田稲作、金属器とほぼ同時期に、大陸方面から伝わったとされる。集団の移動には、墓制も伴う。渡来人が、これらの墓制を持ち込んだと考えられる。

支石墓

支石墓は世界各地で見られる。東アジアでは、支石を箱形に並べた上に天井石を載せたテーブル式と数個の支石の上に長方形に近い天井石を載せた碁盤式が見られる。

日本列島では碁盤式が見られる。この起源は、大陸江南長江河口部・沿海部との説が有力である。列島では、約2500～2200年前に造られたと考えられている。福岡平野以西の福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島県に分布している。

甕棺墓

甕棺墓は、甕・壺を棺とする墓である。東アジアでは、半島南部に大量に、大陸の黄河と長江の流域地方に多く見られる。戦国時代(紀元前5～3世紀)から漢代(前漢:紀元前206年～8年)までは、風習として残っていたといわれる。東南アジアでも紀元前数世紀の頃から、ジャワ島やベトナム中部を中心に甕棺墓が行われていた。海洋民の習俗だったとする見方もある。

北部九州地城、玄界灘沿岸・内陸部地域、有明海北岸地域等に集中して分布する。支石墓より広範囲に及び、福岡平野から東方の遠賀川上流東側にまで分布する。

支石墓・甕棺の分布状況から、次のような見解がみられる。

甕棺墓の分布範囲は支石墓より広い。支石墓より後に拡散したとみられる。

福岡平野周辺地域には、支石墓が存在しない。当時既に、一定の権力体制が確立し、墓制としての支石墓、あるいは、その習俗を持ち込んだ渡来民を受け入れなかった。福岡平野には、豪華な副葬品を伴う墳墓が数多く発見されている。吉武高木遺跡群、須玖岡本遺跡群は支石のない甕棺墓や木棺墓である。三種の神器と同種の副葬品(玉・鏡・剣)が発見された。

福岡平野の東、遠賀川下流域以東には、支石墓・甕棺墓ともに存在しない。この地方も、同様に、墓制としての支石墓と甕棺、あるいは、その習俗を持ち込んだ渡来民を受け入れなかった。福岡平野を中心拠点とした集団と、遠賀川流域以東の集団とは、別の集団であっ

た。

「弥生時代」後期に、急に使用されなくなり、木棺や石棺に変わった。権力の何らかの変更・移動等が生起したと想定される。

支石墓・甕棺の位置づけについて、見解は分かれる。一説では、渡来人が水田稲作と同時期に持ち込んだもので、渡来民が定着・拡大した裏付けであるとする。

他説では、支石墓は渡来人の移住というよりは、習俗の伝播の一例として、まず西北九州へ伝播したとする。

現状からは、支石墓と甕棺分布を、水田稲作とともに、大陸の渡来民が定着・拡大した根拠とすることは難しい。

支石墓・甕棺は北九州の極めて限られた地域にしか分布していない。渡来民の社会が急速に拡大した場合、これらも広範囲に拡散する。そもそも、水田稲作の拡大も遅々として進んでいない。

先進的な渡来民が野蛮な先住民を短期間に制圧・殲滅・駆逐した場合、その象徴は、武力の鉄製武器と、権力の祭祀・墓制である。実用性のある金属器は短期間に急速に普及した。武



器のみならず、さらに、祭器としても使用された。後世、大和王権が成立した際の銅鏡と前方後円墳は典型である。

支石墓から検出された人骨は「弥生人」というより縄文的形質であり、縄文的抜歯風習の頻度も高い。支石墓の伝播と渡来人の移住が一体とは言えない。少数の渡来人が持ち込み、先住民も、埋葬方式として一定期間は採用したことも考えられる。

日本古代史つれづれブログ
古墳は語る「6」～甕棺分布と消滅の謎 より

(4)基本的問題

水田稲作を開始するには、先ず、水田を造成する必要がある。これには、数年を要する。一定の労働力も欠かせない。水田稲作が定着するには、食料としてのイネの安定的供給が確保されることが必要である。これにも、一定の労働力を確保することが必要である。水田稲作が伝播し、拡大するには、これらの条件の基盤となる一定の社会態勢が必要である。

渡来民が水田稲作を開始するには、さらに多くの困難に直面する。渡来民が水田稲作を開始するには、技術・専門知識、労働力、組織力等の一定の態勢も前提となる。特に、食糧確保は集団存続に死活的である。

一般的には、次のように対応すると考えられる。

- ・食料はじめ必要な物資や労働力の輸送手段等を確保する。
- ・先住民から譲り受ける。
- ・先住民から収奪する。

歴史上、異民族の渡来民は侵入者であり、先住民を襲撃・略奪し、食料と労働力を確保した。先住民を隷属的支配下に置き、労働力を確保した。日本列島においても、多数の渡来人が、水田耕作を開始し、拡大するには、在来民を制圧することが必要となる。圧倒的な武力は欠かせない。

「丸腰の集団、あるいは、難民の小さな集団がやってきて水田耕作を始めたという牧歌的な仮説は難があるように思われる。移住者の規模はともかく、その背景に軍事的な力や政策的な意図がなければ、水田の開墾など到底できなかつただろうと思われる。」(佐藤洋一郎氏『米の日本史』)。

現時点では、先住民の社会を壊滅させ、先住民を労働力提供のため、従属的支配下に置いたという事態は、確認されていない。むしろ、これに相反する考古資料は数知れない。

次に、水田稲作を開始した後、定着させ持続させるには、一定の態勢を確立することが欠かせない。即ち、最低限の技術・専門知識と集団としての労働力、これらを機能させるための組織力・集団的秩序と強力な指導力が整っていることである。水田稲作を拡大させるには、これらを支える社会構造が必須である。

水田稲作は東北地方にも拡大したが、やがて、放棄された。理由として、寒冷化、あるいは、縄文の祀りと両立しなかつたなども説明されている。だが、この地域の社会基盤がこれらの持続を支えるには至らなかつたとも想定される。水田稲作は、それ以前の雑駁農耕とは根本的に異なる。

渡来民の人口が、水田稲作拡大と相まって、激増したとする説も再検証が必要である。

この説は、渡来民の人口増加率が先住民を遥かに凌ぐとの試算に基づく。背景として、水田稲作により食糧事情が抜本的に改善されたと想定された。この説は、渡来民の出生率が先住民よりはるかに高いという抽象的仮定に基づく試算を唯一の根拠とした場合でのみ成り立つ。このような事態は、多くの考古資料等の状況から想定し難い。渡来民の食料事情が、有為なほどに、先住民より勝っていたとは確認されていない。先住民、渡来人民ともに、温帯ジャポニカの湿田耕作・陸稲、熱帯ジャポニカ、他の雑穀等の耕作、さらには、園耕が並立していた。渡来民の人口が、水田耕作の拡大により急速に増加した基盤は成立しない。人口面で先住民を圧倒したとはいえない。

3. 渡来民と「縄文・弥生」二分法

縄文・弥生は、本来は、典型的な土器の名称に由来する。斯界では、これに因んで、古代を「縄文人・縄文時代・縄文文化」と「弥生人・弥生時代・弥生文化」に二分している。

近年の研究により、この二分法が実態から、かけ離れていることが明らかになりつつある。水田稲作をもたらした渡来民を弥生人とする見解にも波及する。

この二分法について考察する。

(1)「縄文・弥生」二分法

「縄文人・縄文時代」と「弥生人・弥生時代」の関係は、概ね、次のように説明されている。

最初に渡来した集団の子孫が先住民・「縄文人」である。この時代が「縄文時代」である。彼等は1万年ほど野蛮な漁撈採集生活を送った。

紀元前5-3世紀頃、半島方面から新たな集団・「弥生人」が大挙渡来した。これ以降が「弥生時代」である。彼等は先進文化—弥生式土器、稲作・金属器—を携えて渡来した。いわゆる「弥生三点セット論」とも言える。

その基盤として、「二重構造説」が説かれた。

旧石器時代、東南アジアなどから北上した集団が日本列島に進入し、基層集団を形成した。彼らが列島全域で均一な形質を持つ「縄文人」となった。

列島に入ることなく大陸を北上した集団は、寒冷地に適応し、形質を変化させ、北東アジアの新石器人となった。この集団の中から、朝鮮半島を経由して、稲作をもたらす集団が北部九州に渡来した。「弥生人」である。

「縄文人」と渡来系「弥生人」の形質の違いは、集団の由来の相違に起因する。

これらを前提に、当初は、先進的な渡来民たる弥生人が野蛮な先住民たる縄文人を、短期間に、制圧乃至駆逐したとされた。近年は、概ね、渡来民と先住民は、相争うことなく、平和裏に、統合していったとされている。しかし、多くの重要な事実が説明しきれていない。

「縄文から弥生への時代・文化の以降は、「民族」集団の交替か、それとも在来縄文集団が全く主体的な働きをしたのか、という二分法で割り切ってしまうのは、実態からかけ離れてしまうように思われる。」(石川日出志氏『農耕社会の成立』)

(2)「弥生人」渡来の時期と大陸の情勢

通説では、大陸の混乱期に、「弥生人」が難民として、大挙、あるいは、三々五々、ボートピープルとして、日本列島に渡来した。当時の渡来と渡来後の状況については、前述のとおりである。そこで、改めて、難民が生じた大陸の状況について考察する。

大陸では、天変地異、累次の戦乱等に伴い、特に江南では、多くの人々が難民となった。そ

の結果、次のような事態に、多くの集団が玉突き状態で移動したことは十分想定される。難民の一部が日本列島に渡来した可能性は否定し難い。

紀元前 2000 年頃、世界規模での異常気象・寒冷化により、世界各地の先進文明が衰退・崩壊した。長江文明も例外ではない。この時点で、多数の難民が生まれた。

紀元前 11 世紀頃、殷(商)が滅び、周が成立(紀元前 1046 年頃)する動乱が生じた。北方の殷・周の子孫による玉突き状態で、江南の住民が移動した。

春秋戦国時代以降の統一の過程では、(紀元前 8-3世紀)には、間断なく戦闘が続き、大量殺戮も頻発した。長江流域では、江南では、呉・越・楚が滅亡した(紀元前5-3世紀)。

秦・漢の統一王朝時代、漢の武帝は、江南を完全制圧し、直接支配を強めた(紀元前2世紀)。

三国時代(3-4世紀)、三国間の戦闘が続き、孫呉による江南地域の支配が強化された。

この間、戦乱と大量殺戮は間断なく続いた。江南地方で多数の遺民・難民が生じたと想定される時期は、呉・越・楚の滅亡から統一王朝の成立(紀元前5-3世紀)以降となる。

(3)水田稲作開始の時期と渡来民

通説では、渡来民たる「弥生人」が、大陸方面の先進的な「弥生文化」をもたらした。その象徴が水田稲作である。水田稲作の開始、即ち、「弥生人」渡来と「弥生時代」開始ということになる。

水田稲作が開始された時期は、新旧の通説によれば、紀元前1000年、あるいは、5乃至3世紀とされる。この稲作開始の測定年代は、測定の在り方自体をめぐる異論も多い。

だが、より本質的な問題が内在する。いずれの場合でも、前述のようなイネ・稲作専門家の見解とは基本的な齟齬が生じる。

【水田稲作開始が紀元前1000年の場合】

当時の大陸では、殷の滅亡・周の成立(紀元前11世紀頃)の頃である。

氷河期終了にともない、列島周辺の広大な地域は、スندگانと同様、水没し、大陸棚になった。この地域の住民は大陸、列島等に四散した。

殷(紀元前17-11世紀)を建てた民族は、彼らの一派であり、「東夷」であったともいわれる。殷周革命により、周(漢民族)に追われ、難民が生じたことは想定される。彼らと列島の住民が、かつての同族であったとすれば、難民の一部が渡来することは十分想定される。長江河口地域の造船・航海技術は、他に比較し、はるかに進んでいたといわれる。一説では、周代には、竜骨をもつ船が登場する。

ただし、多数の航海民が、まして、稲作民が渡来するとは想定し難い。渡来は一時期にとどま

るとは言えない。長期的にわたり、数次繰り返されたと想定される。

列島内での水田稲作普及には、1000年以上を要したことになる。水田稲作の拡大が極めて緩やかなペースであったという実態と合致する。

他方、多数の「弥生人」が渡来し、あるいは、人口爆発と相まって水田稲作を急速に拡大したとの説とは明らかに矛盾する。

【水田稲作の開始が紀元前5乃至3世紀の場合】

当時の大陸は戦乱期であった。多数の難民が生じたことは間違いない。彼等の一部が渡来したことは十分想定される。彼等が、大挙して、あるいは、三々五々、ボートピープルとして渡来しえたか否かは、外洋航海の現実性・実行可能性次第である。

戦国時代の呉越両国には、櫂つき(初期の楼船ともいえる)船が登場する。呉は大型軍船(大翼:全長20数^レ、幅3^レ)を有していたと伝える。越は杭州湾岸に軍船基地を建設し、300層の軍船に乗り組む8000名の兵士を擁したと伝える。

しかし、国家存亡の混乱期に、亡国の遺民・難民が多数の軍船や乗員を確保することは想定し難い。厳しい軍律の下で、前述のように周到に準備し、戦線から離脱するという状況も想定し難い。敵への投降を拒否し、未知の蛮地への逃避行を選択することも考え難い。

少数者が戦域から離脱に成功することは十分想定される。だが、国家存亡の戦争の最中、あるいは、国家滅亡の後、多数の遺民・難民が外洋を渡航する体制を確保することは至難である。難民が、少数ずつ長期的に数次繰り返し渡来した場合は、十分想定される。

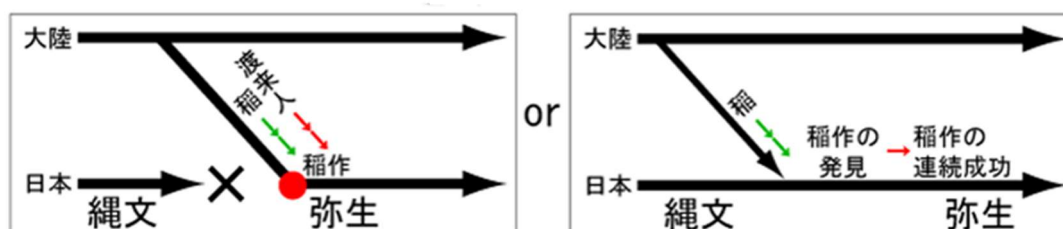
難民が多数渡来した場合、水田稲作は急速に拡大する。渡来民が生き残るためにも当然といえる。列島内での水田稲作は、数百年で普及したことになる。比較的早いペースであり、水田稲作を急速に拡大したとの通説とは矛盾しない。

他方、水田稲作の拡大が極めて緩やかなペースであったという実態とは明らかに矛盾する。

以上から、「弥生人」が大挙して渡来したという状況を想定することは容易ではない。この説を裏付ける、大陸、列島の考古資料等も確認されていない。

他方、少数の集団の場合、一時期にとどまらず、長期的に、数次繰り返されことは、十分想定される。

いずれの場合でも、海洋民が果たした役割が決定的であったことは明らかである。



思考の体操(1) 稲作の始まる日本 魏志倭人伝の夢コラム より

(3)その他の懸案事項

近年の研究により、この二分法が実態から、かけ離れていることが明らかになりつつある。前述のようなイネ・稲作専門家の見解とは基本的な齟齬が生じている。

さらに、二分法には、より本質的な問題が内在する。水田稲作をもたらした渡来民を「弥生人」とする見解にも波及する。

日本語は、基本的に南方系であり、先住民の言語を承継しているとの説が有力である。大和王権では、「三種の神器」の勾玉等、先住民に由来すると思われる祭祀が承継されている。先進的な征服者・支配者(渡来民)が、野蛮な被征服者・被支配者(先住民)の言語を共通語として全面的に採用することはあり得ない。祭祀は権力の象徴である。人間社会の鉄則である。世界史的にも類例がない。

現在の日本人のY染色体DNAの分布では、渡来民と先住民の系統が概ね拮抗している。先進的渡来民が野蛮な先住民を短期間に制圧・殲滅・駆逐した場合、このような結果にはなりえない。世界史を紐解けば自明である。

最近のY染色体DNA分析結果では、従来のような渡来民・弥生人对先住民・弥生人という二元論では通用しない事例もみられる。長崎県・本山岩陰遺跡の「西北九州弥生人」、鳥取県・青谷上寺地遺跡の「弥生人」等が好例といえる。

相当以前から、「縄文人」と「弥生人」の混血が進んでいたとの見解も示されている。「弥生人」が日本列島に渡来した以前から、長期間にわたり、混血が進んでいたとの見解も論理的には成り立つ。

大陸・半島の文献資料には、紀元前から、「倭人」が登場する。彼ら「倭人」と、二分法に基づく「縄文人」「弥生人」との関係は全く、不明とされている。

彼らの居住地域の地理的範囲については、見解が分かれる。言語、習俗を共通にする同一の集団あるいは民族に対する総称として、継続的に使用されたとことも考えられる。極めて限られた記述からも、少なくとも彼らの一部は半農半漁、さらには、漁労を専らとしていたことが窺える。その中には、外洋航海に長けた海洋民が存在したことも十分想定される。大陸から列島に水田稲作が伝播するにあたり、海洋民が果たした役割は決定的であった。彼らが「倭人」であったことも十分考えられる。当時の文献資料では、この集団の他に、明示的な航海民は見当たらない。

終わりに

「弥生人」は渡来民であるとされる。だが、彼らが、何時、何処から、如何に渡来したのかは明

確ではない。

「弥生人」が多数渡来し、水田稲作を開始し、拡大したとの説には、明らかに多くの不整合、齟齬が生じている。四面環海の日本列島に多数が渡来する自体、実行可能性に疑問符が付く。多数の渡来民が水田稲作を持ち込んだ事実は明確とはいえない。水田耕作が大規模に開始され、急速に拡大したという事態も同様といえる。

熱帯ジャポニカの原因は東南アジア(スンダランド地域)である。スンダランド方面から熱帯ジャポニカが大陸に伝わった。当然、住民の移動を伴う。当時のスンダランドの住民が旧モンゴロイドであることは確実とされる。旧モンゴロイドが大陸に移住したことは、十分想定されるが、未だ明確にされていない。

熱帯ジャポニカは、長江流域で水田化され、温帯ジャポニカイネが生まれた。大陸に移住した旧モンゴロイドが長江流域に定着したこと、その後、絶滅したこと、あるいは、新モンゴロイドと並存し混血も生じたことも、未だ明確にされていない。

温帯ジャポニカの水田稲作は、長江流域から日本列島に伝わった。この地域の住民が、少数ながらも移動・移住した可能性は否定し難い。彼らが、新モンゴロイドの他、旧モンゴロイド、あるいは、両者の混血民であったかについてもまた、未だ明確にされていない。

あらゆる資料を有効活用し、総合的に分析評価することが喫緊の課題である。